大分合同新聞
ワークシート

年　組　氏名

大分合同新聞 2025年11月15日(月) 朝刊 2面

論説 2025.11.15

大分国際車いすマラソン

まち全体で迎え入れよう

晩秋の大分路を競技用車いすが高速で駆け抜ける。国内の障害者スポーツの先駆けとして知られる「大分国際車いすマラソン」が16日、大分市で開かれる。44回目となる今年は国内外から約200人の選手が参加。沿道の声援を背にそれぞれの目標に向かって力の限り挑む。

海外選手５人が小学校を訪れ、５年生児童から折り紙で作ったお守りを受け取った＝12日、大分市の大道小学校

大会の起源は障害者の社会参加に尽力した別府市出身の医師、故・中村裕（ゆたか）博士の理念にある。留学先の英国でリハビリの一環としてスポーツに打ち込む障害者の姿に感銘を受けた。「失われたものを数えるな。残ったものを最大限生かせ」の精神を学び、帰国後、世界初の車いす単独のマラソンを実現させた。

競技は障害の程度に応じて三つのクラスに分かれ、男女別にフルとハーフで実施。出場選手は15歳から78歳まで。毎年最年長記録を更新し、今年も出場を目指していた工藤金次郎（くどうきんじろう）さん(99)が大会直前の13日に死去した。「鉄人」と称され、多くの人に勇気と感動を与えてきた名物選手だっただけに、彼の姿が見られなくなったのは残念だ。

参加者はピークの1990年（441人）から漸減傾向が続いている。背景には医療技術の進歩や他の障害者スポーツの発展がある。それでも多様な挑戦者が集う大会の意義は少しも色あせていない。

2020年からハーフの出場者を対象に初挑戦を支援する「ファースト・チャレンジ・アシスト」制度を始めた。競技用車いすの無料貸し出しや事前練習会など経済的、技術的な不安を軽減。参加のハードルを低くして門戸を開いた。今年は過去最多の10人が利用。これまで34人が支援を受け、うち24人が今年は自前で出場する。継続的な支援で競技の裾野を広げている。

またアジアのパラスポーツの発展を目指した「アジア・チャレンジ・アスリート枠」で、今年はベトナムから2選手を招待した。地域発の取り組みが国境を越えて希望を生み出すことを誇りとしたい。

大会を支える協賛企業・団体は過去最多だった昨年をさらに上回り59まで増えた。当日は約1800人のボランティアが通訳や介助、交通整理などで運営を支える。「アスリートファースト」の理念を掲げた円滑な運営は「大分モデル」として、国内外で高く評価されている。

大会前には海外選手が市内の幼稚園、小学校を訪問。交流を通して子どもたちは障害を「特別なもの」としてではなく、人の多様な姿の一つとして受け入れる心を育む。中心商店街ではパレードが行われ、まち全体が大会を迎え入れる雰囲気に包まれる。福祉先進県を標ぼうする大分を象徴する風景である。

大会は障害者の健康増進や社会参加の促進のみならず、共生社会の実現という役割も担っている。沿道での声援やボランティアの支援、地域ぐるみの協力体制など人が人を支え、励まし合う〝社会の原点〟がこの大会にはある。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。

大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

〔問①〕故・中村裕博士が留学先の英国でスポーツに打ち込む障害者の姿に感銘を受け、学んだ精神とは何ですか。

〔問②〕大会が2020年から始めた制度「ファースト・チャレンジ・アシスト」とはどのようなものですか。

〔問③〕記事では、大会は障害者の健康増進や社会参加の促進、共生社会の実現という役割も担っているとしています。あなたは、「大分国際車いすマラソン」の意義をどのように考えますか。また、県民として大会開催をどのように生かしていきたいと思いますか。考えを書いてみましょう。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。